

古今さらしな集



承明門から望む京都御所。左の廊下で「更科の里」のふすま絵のある清涼殿につながる。清涼殿は天皇の住まい

さらしな
縁のな
風景・る
風物



西山部から善光寺平に出る峠、鳥坂峠にあるそば塚。芭蕉の句「蕎麦はまだ花でもてなす山路かな」が刻まれている



藤原定家の書による「御物更級日記」の影印本。笠間書院刊

表紙カバーのデザイン・横田遊樹

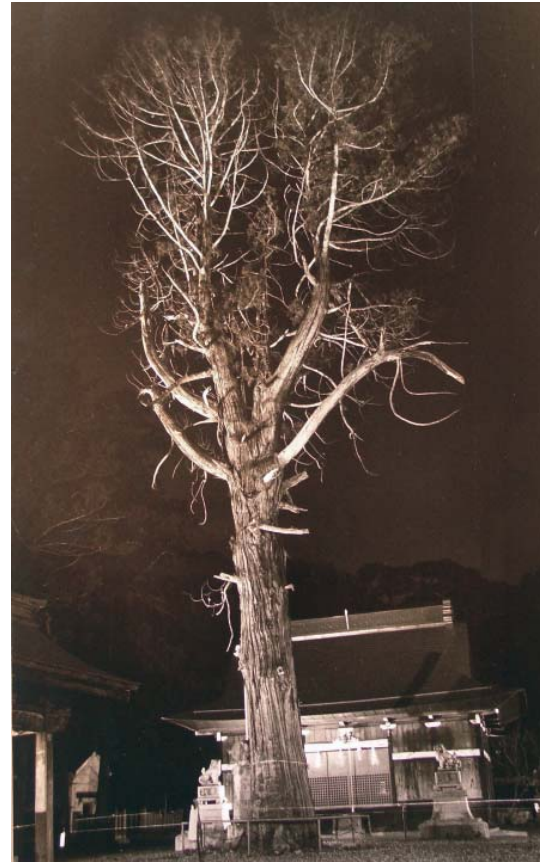


かむりきやま おぼすてやま
冠着山（姨捨山）とさらしなの里を描いた九谷焼大皿。更級村初代村長の塚田小右衛門さんが依頼してつくった

追分の分去れに鎮座する子抱き地蔵。台座の正面に「さらしなは右みよし野は左にて月と花とを追分の宿」の碑文が刻まれている



歌舞伎の演目「紅葉狩」をモチーフにした浮世絵。鬼女に変わる前、宴の席での更科姫



佐良志奈神社にあった綾杉。樹齢約七百年。豊城一夫さん撮影



おぼすて
姨捨の棚田。この近くに長楽寺がある。左の岩が「姪石」。地元農家などのボランティア組織「名月会」の協力とオーナー制度で景観を守っている

はじめに

「さらしな」という言葉を初めて意識したのは「更級日記」の存在を知ったときです。中学校の歴史の授業だったと思います。

「自分の出た小学校の名前が教科書に載ってる！」
「しかも、平安時代に書かれた古典文学！」

周囲の何人かに「このあたりのことが書かれているのか」と聞きました。でも、だれもこの日記には関心がなく、どうもこの辺のことは関係のないことが書かれていると分かって、興味はそれ以上に広がりませんでした。

不惑の年齢に近づいたころ、また気になるようになりました。書いたのが女性、しかも、その女性は、特に中高年の女性の間でブームになっている源氏物語を耽読していた、しかし、晩年は不遇、その境遇が生い立ちを日記スタイルで書かせた……。実際に読むことにしました。古文が苦手だったので、すぐに壁にぶつかりましたが、現代文訳のおかげで概要は分かりました。確かに、現在の「さらしなの里」のことはなにも書かれていません。著者の「菅原孝標の娘」も、「更級」の地に来たわけではありません。役人である夫が晩年、信濃国に単身赴任したということが記されているだけです。

しかし、菅原孝標の娘は明らかに、この里一帯のことをイメージしながらこのタイトルをつけたといわれます。図書館に行って研究書も開いたところ、自分の境遇を娘捨山に重ね、この



おばすてやま 姨捨山の異名を持つ冠着山。
かむりきやま 冠着山の異名を持つおばすてやま。
ふもとに広がる扇状地では
りんご栽培が今も盛ん



更級郡所属の最後の村、大岡村の閉村式。2004年12月12日、旧大岡村文化センターで



更級小学校で1970年以來、毎年発行されているPTA文集「さらしな」

タイトルに決めたということのようでした。

これはすごいことです。「更級」の「文字も出てこない日記なのに、あえて使う。「文章の中でまったく触れずとも読者には分かってもらえる言葉」という思いが前提にあるということですね。時間と空間を超える言葉として、いわば桃源郷、理想郷のような存在として「更級」が口の端にのぼっていたということですね。とてもロマンチックな言葉だったんだと思います。

「さらしな」という言葉はどのように生まれたのでしょうか。

いくつかの説の都合のいいところを取り出し自分流に解釈すると、まず「さら」は「晒す」という言葉と関係があります。布を川の水に晒すと、なだらかに波打ちますよね。「しな」は信濃に代表されるように「坂」を意味します。これを総合すると、小高い山や谷でなる起伏がいくつもあつて坂は多いけど、全体としてなだらかな情景を「さらしな」と命名したことになると思います。更級郡の最高峰である聖山の標高は一四四八メートル。人がさほど苦もなくたどりつける高さ。そして更級郡はこの山の頂上から北は犀川、東は千曲川に下っていく一帯を言いますので、この考えもあながち的外れではないような気がするのですが。

埴科、倉科、明科、妻科、蓼科……「しな」とつく地名はたくさんあります。この中で「級」の字でもよく知られているのは、私が知る限り「更級」だけです。これはなぜでしょうか。

級という漢字の成り立ちは、機を織るときに次々に繰り出される糸の意味を表す、と漢和辞典にあります。そう言えば旧更級村には「更級斜子」と呼ばれ、北信一帯にここを技術の起源として広まった織物がありました。「更級そば」は江戸時代から人気を博しますが、そば切りは、糸の姿にも見えます。やはり「さらしな」には「級」が似合う——と言ったらひいき目が過ぎる

でしょうか。

更級という言葉を全国区にさせる大きな核になったと考えられるのが、「続日本記」の中で触れられている「更級郡の建部大垣」の存在です。

続日本記は奈良時代の国史で、日本書紀に続く国の歴史を記したものです。年月と日付を明記した上で、朝廷が更級郡の建部大垣という人物を「親孝行だ」とほめ、税金を免除したと、記しているのです。これが冠着山に姨捨山の別名を与え、小説や映画で姨捨伝説のメッカにしていく原点です。

この、もともとのところが大事なような気がします。この一帯でよく知られる姨捨伝説には親しい子どもとともに、知恵のある老人が登場し、その老人によつて国が救われます。親孝行の子と知恵のある老人が存在しつづけないと、この地はオリジナルな「更級」ではなくなってしまう。

二〇〇五年一月、更級郡大岡村が長野市と合併し「更級郡」が消滅しました。郡が設けられた今から約千四百年前の飛鳥時代、信濃国は十郡で成り立っていました。明治時代になって、長野県はうち六つを上下と南北に分け、計十六郡としたのですが、まるごと一つの郡がなくなつたのは更級郡が初めてです。これは歴史的な事件です。更級とは何なのか、古から現在までさまざまな角度から取り上げ、味わってみたいと思います。「さらしな」の漢字には更級、更科、佐良志奈などが出てきます。これはそれぞれのテーマに伝統的にふさわしい表記を用いています。お好きなところからひもといていただければ、うれしく存じます。

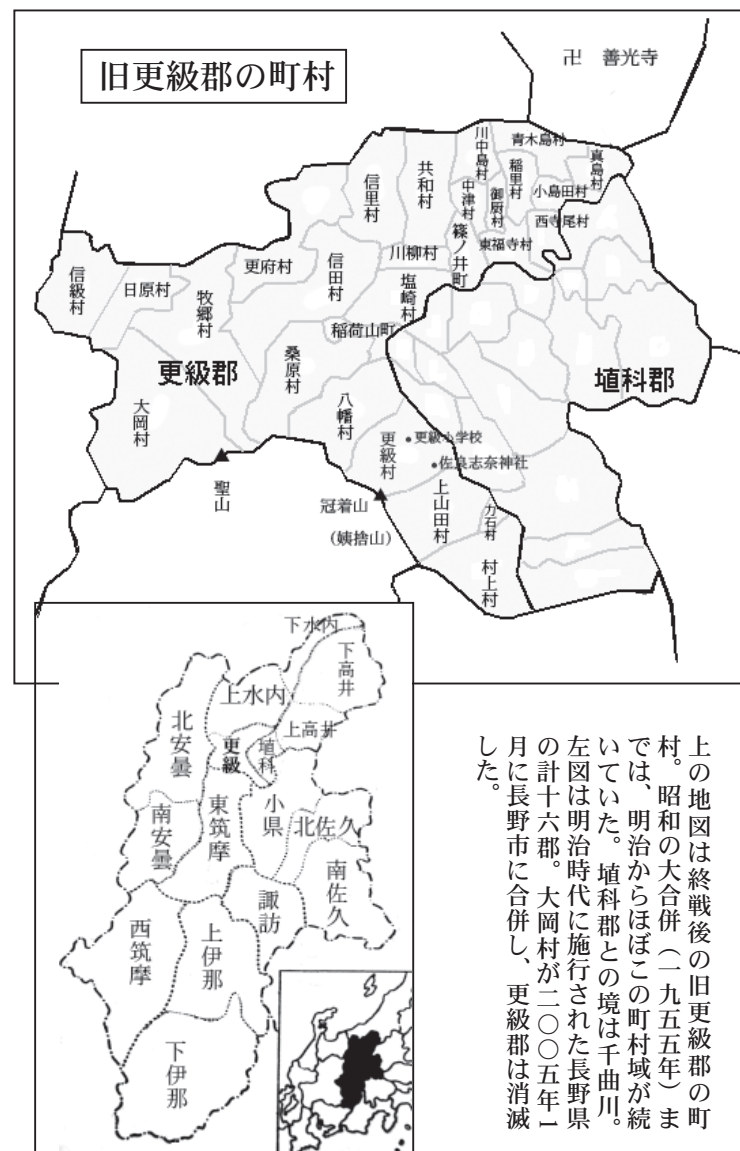
目次

まえがき 1

京都御所に描かれた「さらしなの里」	8	本当のひとりになるために	55
夫の死が「更級日記」を書かせた	12	能楽に盛り込まれた更級と姨捨	60
更級に心引かれた藤原定家	16	井上靖のルーツを刺激した姨捨	65
天皇家の宝物である「更級日記」	20	新しい村名が与えた誇り	70
古の作家を触発し続けた歌	24	日本の美意識が社標に	74
望月と田毎が仕えた更科姫	28	新村名の後ろ盾「姨捨山所在考」	78
甲州の作家が信州舞台に「榎山節考」	32	百五十年前に刻まれた「更級」	83
堀辰雄が口ずさんだ「更級」	37	佐良志奈神社にあつた七百年杉	87
精進の道しるべとなつたそば	42	公民館報に見る更級村の勢い	92
神聖な白を味わわせたそば	46	東京更級会の物心両面の支援	97
さらしなを体感して奥の細道へ	51	冠着山が姨捨山の異名を持つ訳（上）	102

冠着山が姨捨山の異名を持つ訳（下）	107	掛軸に残る江戸の偉人の交流	165
多様な呼び名持つ冠着山	112	恋を成就させたスイッチバック	170
浅井泷の更級への思い入れ	117	村々がつくつた更級の景観	174
子どもを熱くした郷土学習	122	縄文が老いの価値を発見した	178
今もつづられる更級日記	128	みんなで造つた更級中学校	183
更級であつた川中島合戦	134	更級村を詠みこんだ歌の数々	188
「更級」姓への高包さんのこだわり	138	栃木県にあるさらしなの物語	193
村々を鉄道唱歌に乗せて	142	月がサルを人類にした？	198
更級郡民の親睦、言論誌	147	千曲の水は青く白く	203
更級郡の商都だつた稲荷山	152	こだわりの酒「佐良志奈」	207
お国を内外に知らしめた更級斜子	156	自分史の先駆けである「更級日記」	212
りんご栽培の先進地	161		
あとがき	218		

古今さらしな集



上の地図は終戦後の旧更級郡の町村。昭和の大合併（一九五五年）までは、明治からほぼこの町村域が続いていた。埴科郡との境は千曲川。左図は明治時代に施行された長野県の計十六郡。大岡村が二〇〇五年一月に長野市に合併し、更級郡は消滅した。

京都御所に描かれた「さらしなの里」

—更級日記作者も見ていた？

天皇の部屋のみすまに「更科の里」の絵がある—。

千曲市羽尾地区（旧更級村）在住の郷土史家、塚田哲男さんに教えていただきました。

東京にある皇居ではなく京都にある京都御所です。宮内庁の協力で毎日新聞社が編集した「御物・皇室の至宝6」にそのみすま絵が載っていました。京都御所には古来の名所を描いたみすまがたくさんあるのですが、その一つに「更科の里」が取り上げられています。旧戸倉町（現千曲市）側の山腹から千曲川をはさみ冠着山を遠望する構図です。

天皇の寝室？

御所は天皇家の儀式や執務を行う宮殿で、今から約千二百平前、平安京の建設の際に造営されました。明治初め、天皇家が旧江戸城に移って皇居となるまで、日本の象徴的な建物でした。ただ幾度もの火災に遭い、現在の御所は江戸末期の一八五五年（安政二）に造られたものです。「更科の里」が描かれたみすまは、御所を構成する一つの建物「清涼殿」の中、「萩戸」と呼ばれる部屋にあります。

清涼殿は天皇の日常の住まい、つまり自分の家のようなもので、風呂から食堂まで暮らしを送る上で必要な機能が設けられており、現在の清涼殿は平安時代の姿により近づけた構造になっていくそうです。そして萩戸は天皇の居室で、ここで寝起きしていたとの説があります。



清涼殿

萩戸には計八面のみすまがあり、二面がワンセットで、北西側の二面が「更科の里」です。右上に方形の枠が施されていますが、ここに和歌が詠まれ、それをモチーフに絵が描かれています。その和歌は—

へおばすてのやまぞしぐれる風見えてそよさらしなの里のたかむら〜

「たかむら」は漢字を当てるとしたら「高村」でしょうか。だとすれば歌の意味は、姨捨山は木々の葉が落ち、小雨にけぶっている、風にすすぎがそよぎ、ふもとのさらしなの里はなんともいえぬ風情をかもし出している—と解釈できます。

この歌を詠んだのは飛鳥井雅典という公家。飛鳥井は江戸幕府が政策を実行する際の許可を天皇からもらうための取り次ぎ役「武家伝奏」という役職を担い、近藤勇らの浪士グループを「新撰組」と名づけた人物だそうです。絵は大和絵の名門の子孫である土佐光清が描きました。

公家が詠んだ歌をモチーフに絵を描くというのは平安時代から始まったスタイルです。それを知って思ったのは、ということは平安時代も「更科の里」は萩戸に描かれていたのか、という疑問です。